

一過性の関係による場の創造と意義

～ホステル、WWOOF、シェアハウスでの事例を通して～

北海道大学 文化人類学研究室 4年 中井千博

短期的な人間関係、恩送り、贈与、第三者に対する「私たち」、共同性

要旨

本研究は、ホステル、WWOOF、シェアハウスといった短期滞在者が循環する生活空間を対象に、一過性の出会いの場において人々がいかなる関係を築き、どのように共同性が生成されるのかを明らかにすることを目的とする。それを通して短期的な人間関係でも我々にとって意味のあるものだと提示することにこの論文の意義がある。調査方法としては、筆者自身がこれらの場に滞在した経験をもとにした参与観察を中心とし、日常的なやり取りや贈与、共同作業、慣習の形成過程を記述・分析した。分析の結果、ホステルでは旅という非日常的な空間から、身分や肩書きの関係しない純粋な「ただの人」同士の関係が生じ、WWOOFではホストとボランティアの間には労働とその対価が曖昧な中で無償の行為のやり合いによる関係性の強化が、ボランティア参加者間には、互いに贈与し合うことによる関係性の強化が見られた。また、シェアハウスにおいては、退去者の置き土産やパーティーの慣習が「恩送り」として機能し、短期的な入居の循環にもかかわらず、場に時間的連続性が生み出されていた。さらに、WWOOFではウーファー同士がホストという第三者に対して、シェアハウスでは住人同士が管理会社という第三者に対して、またホステルにおいても一時的ではあるが共通の問題に対して、「ここにいる私たち」として自己を位置づける場面が確認された。このように外部の第三者の存在によって内部の関係が輪郭づけられ、暫定的な共同性が生成されている点は、一過性の場における関係形成の重要な特徴である。また、長期居住者は過去の出来事や慣習を記憶・媒介する「時間的連続性の見届け人」として機能し、共同性の維持に寄与していた。以上より、本研究は、一過性の関係が決して表層的なものではなく、贈与や恩送り、第三者に対する〈私たち〉の形成を通じて、独自の共同性を立ち上げうることを示した。一過性の場における関係性の分析は、現代社会における人間関係の多様なあり方を再考するための重要な視座を提供するものである。